

「続茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」に登場する動植物についての考察

岸 一弘*

1 はじめに

「続茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」は、茅ヶ崎町立鶴嶺尋常高等小学校(現鶴嶺小学校)により「茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」の続編としてまとめられた。「茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」とは異なり、手書き原稿のままで刊行されていないが、平山孝通氏のご厚意でコピーをいただくことができた。平山氏のご教示によれば、昭和8年8月までの統計資料が盛り込まれていることから、昭和8年の後半もしくは昭和9年にまとめられたものではないかとのことである。

「茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」に登場する動植物については、岸(2014)で考察されているところであるが、「続茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」(以下、本誌)には「茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」より多くの動植物が記載されている。「茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」などには記載されていない種類や現在では絶滅してしまった種類もあり、たいへん興味深い資料である。

本稿では、本誌に記載されている種類について紹介するとともに、生態学、形態学等の観点からの考察を試みてみたい。

※「茅ヶ崎町鶴嶺」：茅ヶ崎南西部の西久保から柳島にかけての地域を指す。

2 記載されている昆虫類

※()内は、現在の表記もしくは分類名である(植物についても同様)。

(1) 膜翅目(ハチ目)

(イ) 益虫

蜜蜂科：みつばち

姫蜂科：あげはひめばち

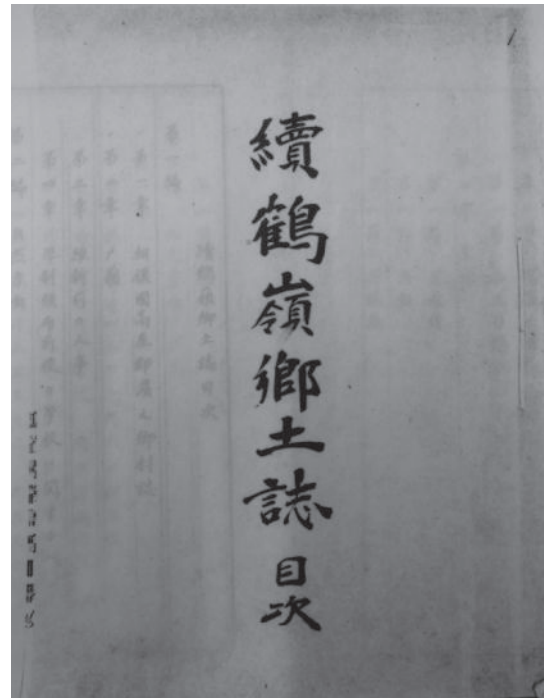
(ロ) 害虫

胡蜂科(スズメバチ科)：くろすずめばち、あしながばち、すずばち(現在ではドロバチ科)

腰細蜂科(ジガバチ科)：るりじがばち、じがばち

土蜂科：はらながつちばち

蟻科：くろおほあり(クロオオアリ)、むねあかおほ



「続茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」原本表紙

あり(ムネアカオオアリ)、くろくさあり

葉蜂科：まつのきいろばち(マツノクロホシハバチ?), かぶらばち(カブラハバチ)

細蜂科(コンボウヤセバチ科)：こんぼうやせばち(オオコンボウヤセバチ?)

(2) 雙翅目(ハエ目)

(イ) 益虫

食蚜蠅(しょくがばえ)科(ハナアブ科)：ひらたあぶ

家蠅科：やどりばへ

(ロ) 害虫

家蠅科：いへばい(イエバエ), きんばい(キンバエ), さしばい(サシバエ), ひめべっこうばい(ヒメベッコウバエ)

牛蠅科(ヒツジバエ科)：うまばい(ウマバエ)

食蚜蠅(しょくがばえ)科(ハナアブ科)：はなあぶ, のらはなあぶ(シマハナアブ), おほはなあぶ(オオハナアブ)

長脚蠅科(アシナガバエ科)：あしながきんばい(アシナガキンバエ)

食蟲虻科(ムシヒキアブ科)：むしひきあぶ, しほや

あぶ(シオヤアブ)

虻科：うしあぶ, きいろあぶ(キンイロアブ?)

水虻科：みづあぶ, こがたみずあぶ(コガタノミズアブ)

大蚊科(ガガンボ科)：みかどががんぼ, まだらがが
んぼ

蚊科：か, はまだらあかか(ハマダラカ?), しろか
たやぶが(シロカタヤブカ), しろすじやぶか(ヒトス
ジシマカ?)

搖蚊科(ユスリカ科)：ぬかか

蚋科(ブユ科)：きあしぶゆ(キアシオオブユ?)

(3) 蠍蟲目(シリアゲムシ目)

(イ) 益虫

舉尾蟲科(シリアゲムシ科)：しりあげむし(ヤマトシ
リアゲ?)

(ロ) 害虫 なし

(4) 鱗翅目(チョウ目)

・蝶亜目(蝶類のことを指すが、現在では存在しない
分類単位)

(イ) 益虫 なし

(ロ) 害虫

鳳蝶科(アゲハチョウ科)：あげはてふ(アゲハ), き
あげは, くろあげは

粉蝶科(シロチョウ科)：もんしろてふ(モンシロチョ
ウ), すぢぐろてふ(スジグロシロチョウ), もんきて
ふ(モンキチョウ), きてふ(キチョウ; 現在の標準和
名はキタキチョウとなっている)

蛱蝶科(タテハチョウ科)：たてはてふ, いちもちて
ふ(イチモンジチョウ)

小灰蝶科(シジミチョウ科)：しじみてふ

弄蝶科(セセリチョウ科)：だいめうせせり(ダイミョ
ウセセリ), ちやまだせせり, ほそばせせり

・蛾亜目(蛾類のことを指すが、現在では存在しない
分類単位)

(イ) 益虫

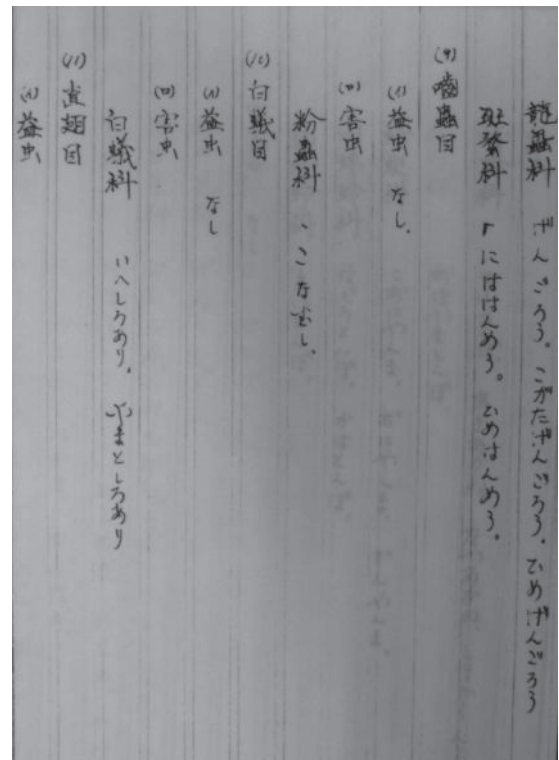
蚕蛾科(カイコガ科)：かいこ(カイコガ; 家畜)

天蚕蛾科(ヤママユガ科)：やままい(ヤママユ)

(ロ) 害虫

夜蛾科：よとうが, ふくらすずめ, あけびこのは

毒蛾科：どくが



「続茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」原本本文(第四章生物 第一節昆虫
の一部)

天蛾科(スズメガ科)：ももすずめ, うちすずめ, こ
すずめ, おほすかしば, せすずめ(セスジスズメ?)

尺蛾科：えだしゃく, くわえだしゃく

螟蛾科(メイガ科)：にかめいが, さんかめいが

刺蛾科(イラガ科)：いらが

(5) 毛翅目(トビケラ目)

(イ) 無害無益

石蚕科：どろつとむし

(ロ) 害虫

石蚕科：どろつとむし

(6) 脈翅目(アミメカゲロウ目)

(イ) 益虫

蚊蜻蛉科(ウスバカゲロウ科)：うすばかげろう

廣翅蜻蛉科(クサカゲロウ科)：くさかげろう

(ロ) 害虫 なし

(7) 半翅目(カメムシ目)

・同翅亜目(現在ではあまり使用されなくなった分類
単位)

(イ) 益虫 なし

(ロ) 害虫

介殼虫科：なしのまるかいがらむし(ナシマルカイガ)

ラムシ), くわのかいがらむし(クワコナカイガラムシ?), わたふきかがらむし

蚜虫科(アブラムシ科): くりのくまありまき(クリオオアブラムシ?), やなぎのおほありまき(ヤナギコブオオアブラムシ?), だいこんありまき(ダイコンアブラムシ?)

蟬科: くまぜみ, ちっちぜみ, はるぜみ, みんな(ミンミンゼミ), ひぐらし, あぶらぜみ, つくつくぼうし

白蠟科(ウンカ科): せじろうんか, とびいろうんか, こぶんか(コブウンカの誤記)

浮塵科(通常ウンカ科を指すが, ここではヨコバイ科を指している): いまぐろよこばい(ツマグロヨコバイの誤記), いなづまよこばい

・異翅亜目(カメムシ亜目)

(イ) 益虫

食蟲棒象科(サシガメ科): あかへりさしがめ

(ロ) 害虫

紅娘華科(タイコウチ科): たいこうち, みづかまきり

椿象科(カメムシ科): むらさきがめ(ムラサキシラホシカメムシ?), くさぎかめ(クサギカメムシ), いちもじかめむし(イチモンジカメムシ), なしがめ(ナシカメムシ)

食蟲棒象科(サシガメ科): ごみあしながさしがめ

水黽科(アメンボ科): ひめかはぐも(ヒメアメンボ?)

(8) 鞘翅目(コウチュウ目)

(イ) 益虫

瓢蟲科(テントウムシ科): ななほしてんとう, てんとうむし(ナミテントウ), あかぼしてんとうむし(アカホシテントウ)

螢科: げんじぼたる, へいけぼたる

吉丁蟲科(タマムシ科): たまむし(ヤマトタマムシ)

歩行蟲科(ゴミムシ科): ごみむし

斑蝥科(ハンミョウ科): みちしるべ(ハンミョウ)

(ロ) 害虫

偽瓢蟲科: てんとうむしだまし(テントウムシ科のニジュウヤホシテントウ類のことである)

金花虫科(ハムシ科): るりはむし, くははむし(クワ

ハムシ), いねどろはむし(イネドロオイムシ), ひめはむし(フタスジヒメハムシ?), うりはむし

擬叩頭蟲科(コメツキモドキ科): こめつきもどき

天牛科(カミキリムシ科): しろすぢかまきり(シロスジカミキリの誤記), ごまだらかまきり(ゴマダラカミキリの誤記), くはかみきり(クワカミキリ)

小蠹蟲科(キクイムシ科): くはひめこしんくひ(クワノキクイムシ?)

三錐象鼻蟲科(ミツギリゾウムシ科): みつきりざうむし(ミツギリゾウムシ)

豆象鼻蟲科(マメゾウムシ科): まめざうむし

象鼻蟲科(ゾウムシ科): こふきざうむし, ひめざうむし, こくざうむし(コクゾウムシ: 現在はオサゾウムシ科に分類されている)

地膽科(ツチハンミョウ科): まめはんめう(マメハンミョウ)

叩頭蟲科(コメツキムシ科): こめつきむし

吉丁蟲科(タマムシ科): くらたまむし, あをたまむし, おばたまむし(ウバタマムシ)

金龜子蟲科(コガネムシ科): かぶとむし, どうがね(ドウガネブイブイ), あをかなぶん, かなぶん, こがねむし

鍬形蟲科: くはがたむし, あかあしくはがた, ひらたくはがた

鼓豆蟲(ミズスマシ科): みづすまし, ひめみづすまし

龍蝨科(ゲンゴロウ科): げんごろう, こがたげんごろう(コガタノゲンゴロウ), ひめげんごろう

斑蝥科(ハンミョウ科): にははんめう(ニワハンミョウ), ひめはんめう(ヒメハンミョウ)

(9) 嚙蟲目(チャタテムシ目)

(イ) 益虫 なし

(ロ) 害虫

粉蟲科(コナチャタテ科?) こなむし(コナチャタテ?)

(10) 白蟻目(シロアリ目)

(イ) 益虫 なし

(ロ) 害虫

白蟻科: いへしろあり(イエシロアリ), やまとしろあり

現在は、いずれもミゾガシラシロアリ科に分類されている。

(11) 直翅目(バッタ目)

(イ) 益虫

螳螂科(カマキリ科) : かまきり

蟋蟀科 : かねたたき, すずむし

現在では、カネタタキはカネタタキ科、スズムシはマツムシ科に分類されている。

螽蟴科(キリギリス科) : きりぎりす(ヒガシキリギリス), うまおひむし(ウマオイの一種), くつはむし(現在では、クツワムシ科に分類されている), つゆむし(現在では、ツユムシ科に分類されている), ささきり

(ロ) 害虫

蠼螋科(ハサミムシ科; 現在はハサミムシ目となっている) : はさみむし

蝗蟲科(バッタ科) : いなご(コバネイナゴもしくはハネナガイナゴ), ばった

螻蛄科(ケラ科) : けら

蟋蟀科(コオロギ科) : えんま(エンマコオロギ), つづりさせ(ツヅレサセコオロギ), みつかど(ミツカドコオロギ)

(12) 積翅目(カワゲラ目)

(イ) 益虫

積翅蟲科(カワゲラ科) : かはげら

(13) 蜻蛉目(トンボ目)

(イ) 益虫

蜻蛉科(トンボ科) : てふとんぼ(チョウトンボ), あきあかね, なつあかね, しほからんとぼ(シオカラトンボの誤記), おほやまとんぼ(オオヤマトンボ; エゾトンボ科)

蜻蛉科(ヤンマ科) : こおにやんま(サナエトンボ科), おにやんま(オニヤンマ科), ぎんやんま

川蜻蛉科(カワトンボ科) : はぐろとんぼ, かはとんぼ

絲蜻蛉科(イトトンボ科) : きいととんぼ

(ロ) 害虫 なし

3 記載されている昆虫類に関する考察

本誌には、益虫と害虫に区分して173種の昆虫類

が記載されている。茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌に比べ昆虫類に多くの頁を割いており、執筆者が昆虫類に造詣の深かったことが伺える。

鳴く虫を益虫と害虫に分けている点が興味深く、親しみを感じる鳴く虫であっても農作物への食害が大きいものは害虫に区分したのであろうか。

・ムネアカオオアリ : 樹林地に生息するアリ類で、市内における確実な記録はない。

・ダイミョウセセリ : 現在市内では高田以北でないと生息していないが、かつては南西部の鶴嶺地区にも生息していたのであろうか。

・ホソバセセリ : 1992年の清水谷での記録を最後に記録が途絶えており、市内から絶滅したものと思われる。かつては、鶴嶺地区にも生息していたのであろう。

・「ちやまだせせり」 : チャマダラセセリのことであると思われる。チャマダラセセリは草地環境に生息する種類で、神奈川県内(以下、県内)では伊勢原市大山と箱根町仙石原の古い記録しかない(中村ほか, 2004)が、今から80年ほど前の茅ヶ崎には、本種が生息していたのであろうか。

・ハルゼミ : 1994年の萩園(相模川河川敷)の記録を最後に市内の記録が途絶えているが、かつては市内各所に生息していた可能性があることを伺わせる。

・チッチゼミ : 山地性の種類なので茅ヶ崎に生息していたとは思えず、誤記と思われる。

・ナシカメムシ : 県内では山地から丘陵地で記録されている種類である。市内における確実な記録は得られていないが、かつては市内に生息していたのであろうか。

・ゴミアシナガサシガメ : 全国的に激減している種類で、県内での確実な記録はない。標本が残されていないのが残念である。

・ゲンジボタル : 市内で確実に自然発生と考えられる記録は得られていないが、かつては小出川に生息していたものと思われる。

・ハンミョウ : ハンミョウ科として上記のとおりニワハンミョウとヒメハンミョウが記載されているので、ハンミョウを識別していたことは確かである。市内におけるハンミョウの確実な記録は残されてい

ないが、かつては市内に生息していたのであろうか。

- ・「みつかりざうむし」：ミツギリゾウムシ類は山地性の種類であり、市内に生息していたとは考えにくい。

- ・アオタマムシ：県内では丹沢山地で記録されているが、かつては市内にも生息していたのであろうか。

- ・アオカナブン：湘南地域では大磯丘陵に生息しているが、相模川以東の湘南地域から三浦半島にかけては記録がない(平野, 2004)。しばしばカナブンの緑色型と混同されるので、誤認の可能性もある。

- ・アカアシクワガタ：山地から丘陵地に生息する種類で、市内では確実な記録はないが、かつては市内にも生息していたのであろうか。

- ・ミズスマシ・ヒメミズスマシ：いずれも現在は丹沢山麓のみに分布するが、かつては低地にも分布していたことを伺わせる。

- ・ゲンゴロウ・コガタノゲンゴロウ：いずれも県内では絶滅種に位置づけられている(荻部, 2006)が、かつては市内にも生息していたことを伺わせる。ちなみに、ゲンゴロウは矢畑の遺跡から室町時代後半期から戦国期(16世紀)の遺体が出土している(富永, 1994; 平野・岸, 1994)。

- ・チョウトンボ：県内での減少著しく、県の絶滅危惧 IB 類に位置づけられている(荻部ほか, 2006)が、かつては市内にも生息していたものと推察される。現在でも時折市内で成虫が記録されているが、幼虫の生息に適した止水域がないので、市内で発生したわけではなく、他地域からの飛来個体と考えられている。

- ・コオニヤンマ：相模川及び引地川下流域では幼虫が記録されているが、小出川下流域では幼虫・成虫いずれの記録も得られていない。近年柳谷などで 7exs. の成虫記録が得られており(岸, 未発表), 柳谷もしくは周辺水域で発生している可能性が高い。かつては、小出川に広く生息していたのであろうか。

- ・カワトンボ(ニホンカワトンボ)：市内における記録はないが、小出川の源流域である藤沢市の遠藤笹窪谷では 1995 年まで生息していた(岸, 1999)ので、かつては小出川に広く分布していたものと推測される。

- ・キイトンボ：1970 年代前半までは市内で発生が見られていた(岸, 1982)が、その後は散発的な記録が得られているだけである(岸, 1996; 1999)。1980 年代以降の記録は、他所からの移動個体もしくはそれに由来する一時的な発生と考えられる。荻部ほか(2006)により、県の絶滅危惧 IB 類に位置づけられている。

- ・くはがたむし：アカアシクワガタ、ヒラタクワガタも記載されているので、コクワガタもしくはノコギリクワガタを指しているものと思われる。

- ・かまきり：チョウセンカマキリの別名として使用されることもあるが、他のカマキリ類が記載されていないので、総称として使用されている可能性が高い。

- ・「あしながばち」、「はらながつちばち」、「ひらたあぶ」、「やどりばへ」、「か」、「ぬかか」、「たてはてふ(タテハチョウ)」、「しじみてふ(シジミチョウ)」、「えだしゃく」、「くさかげろう」、「こめつきもどき」、「まめざうむし(マメゾウムシ)」、「ひめざうむし(ヒメゾウムシ亜科)」、「こめつきむし」、「ばった」にはそれぞれ複数の種が含まれるが、どの種を指しているのかは不明である。

また、「どろつとむし」がトビケラ目のどのグループを指すのかは、不明である。

4 記載されている植物

(1) 我が郷土に普通の雑草

菊科：こうぞりな、むかしよもぎ(ヒメムカシヨモギ?)、せんだんぐさ、やまあざみ、はるののげし、やぶたびらこ、たかさぶろう、やぶたばこ、ひよどりばな、よもぎ、よめな(カントウヨメナ)

車前科(オオバコ科)：おほばこ(オオバコ)

爵林科(キツネノマゴ科)：きつねのまご

脣形科(シソ科)：えごま、はっか

茄科(ナス科)：いぬほほづき(イヌホオズキ)

蓼科(タデ科)：あかざ

石竹科(ナデシコ科)：うしはこべ

莧科(ヒユ科)：いぬびゆ、みのこづち

繖形科(セリ科)：せり、のちどめ

柳葉菜科(アカバナ科)：ちゃうちたで(チョウジタデ)

毛茛科(キンポウゲ科) : きつねのぼたん
 牻牛兒科(フウロソウ科) : げんのしゃうこ(ゲンノシヨウコ)
 三白草科(ドクダミ科) : どくだみ、はんげしゃう(ハンゲシヨウ)
 荳科(マメ科) : おほぼくさふじ(オオバクサフジ)、めどはぎ、のまめ(ツルマメ)、やはづくさ(ヤハズソウ)、つるふじばかま、やぶはぎ
 莎草科(カヤツリグサ科) : かはらすがな(カワラスガナ)、こうぼうむぎ、たまがやつり、いとてんつき、あぜがやつり、あぜてんつき、しまてんつき、かやつりぐさ
 禾本科(イネ科) : ちからぐさ(オヒシバ)、ねずみのを、あしぼそ、こぶなぐさ、めひしば、かぜくさ、きんえのころ、ちからしば、すずめのひえ、とだしば
 蓼科(タデ科) : にはやなぎ(ミチヤナギ)、とげそば(ママコノシリヌグイ)、あきのうなぎつかみ、みぞそば、白花さくらたで、おほいぬたで、ぬかぼたで、いたどり
 薔薇科 : きんみづひき
 葡萄科 : やぶからし
 十字花科(アブラナ科) : いぬがらし
 鴨跖草科(ツユクサ科) : つゆくさ
 酢漿草科(カタバミ科) : かたばみ
 大戟科(トウダイグサ科) : にしきさう(ニシキソウ)、こにしきさう、えのきぐさ
 蕃杏科(ツルナ科) : ざくろさう(ザクロソウ; 現在ではザクロソウ科)
 桑科 : かなむぐら
 木賊科(トクサ科) : すぎな
 (2)「郷土に自生する薬用植物普通の雑草」
 蓼科(タデ科) : いたどり
 石竹科(ナデシコ科) : はこべ(コハコベ?)
 繖形科(セリ科) : ちどめぐさ
 菊科 : あざみ(ノアザミもしくはタイアザミ?)

5 記載されている植物に関する考察

・やまあざみ : ヤマアザミは四国、九州に分布する種類なので、「やまあざみ」はアズマヤマアザミと

推察される。

・イトテンツキ : 湿地周辺に生育するカヤツリグサの一種で、県内では稀な種類である。県の絶滅危惧IA類に位置づけられており、市内での確実な記録はない(勝山ほか, 2006; 神奈川県植物誌調査会編, 2001)。

・シマテンツキ : 九州、沖縄に分布する種類なので、誤認の可能性が高い。

・ヌカボタデ : 湿地に生育するタデ科の一種で、返子で1918年に採集された標本が残されている(神奈川県植物誌調査会編, 2001)が、勝山ほか(2006)では絶滅種に位置づけられている。

まとめ

上述したように、本誌に記載されている昆虫類・植物には、県内・市内からすでに絶滅した種類が少なからず見られる。80年ほどまえの市内南西部は樹林、草地、水辺環境が豊かで、現在では想像もできないほど極めて生物多様性の高い地域であったことがわかる。県内もしくは市内ですでに絶滅種となっている動植物が、他にも見られたことが推察される。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、種々ご教示いただいた茅ヶ崎市文化生涯学習課の平山孝通氏に感謝申し上げます。

参考文献

- 平野幸彦, 2004. コウチュウ目. 神奈川県昆虫誌, pp. 335-835. 神奈川県昆虫談話会, 小田原.
- 平野幸彦・岸 一弘, 1994. 茅ヶ崎市金山遺跡(第一次調査)から出土した昆虫遺存体. 文化資料館報告, (2) : 9-15.
- 飯島小平, 1963. 柳田のおじさんの思い出. 定本柳田國男集第12巻月報. 筑摩書房.
- 神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌, 1584 pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 荻部治紀・川島逸郎・岸 一弘, 2006. トンボ類. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書

- 2006, pp. 311-324. 神奈川県立生命の星地球博物館, 小田原.
- 荏部治紀, 2006. 水生甲虫. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp. 385-392. 神奈川県立生命の星地球博物館, 小田原.
- 勝山輝男・田中徳久・木場英久・神奈川県植物誌調査会, 2006. 維管束植物. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp. 37-130. 神奈川県立生命の星地球博物館, 小田原.
- 岸 一弘, 1982. 湘南地方で採集或いは目撃した若干の蜻蛉について. 神奈川虫報, (65):10.
- 岸 一弘, 1996. 茅ヶ崎・藤沢のトンボ類. 文化資料館報告, (4):7-34.
- 岸 一弘, 1997. 茅ヶ崎の蝶類. 文化資料館報告, (5):19-66.
- 岸 一弘, 1999. 茅ヶ崎・藤沢のトンボ類2. 文化資料館報告, (7):23-42.
- 岸 一弘, 2007. 茅ヶ崎・藤沢の直翅類4. 文化資料館報告, (15):15-35.
- 岸 一弘, 2014. 「茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌」に登場する動植物についての考察. 文化資料館報告, (23):5-10.
- 中村進一・芦田孝雄・原 聖樹・岩野秀俊・美ノ谷憲久, 2004. チョウ目(チョウ類). 神奈川県昆虫誌, pp. 1159-1228. 神奈川昆虫談話会, 小田原.
- 富永富士雄, 1994. 茅ヶ崎市金山遺跡第1次調査の成果—昆虫を出土した15号溝状遺構の概要—. 文化資料館報告, (2):1-8.
- 鶴嶺小学校編, 1976. 茅ヶ崎町鶴嶺郷土誌. 資料館叢書, (2):22-24. 茅ヶ崎市文化資料館.

*茅ヶ崎野外自然史博物館



1992年の記録を最後に茅ヶ崎から絶滅したホソバセセリ



現在では丹沢山麓のみに生息するミズスマシ



かつては小出川に生息していた？ゲンジボタル



1970年代後半に市内から絶滅したキイトンボ



市内での確実な記録はないハンミョウ